核データニュース, No. 58 (1997)

# マクベスとシングル・モルトとカシミアと

データ工学
浅見　哲夫

今年の７月下旬から８月上旬にかけて，スコットランド各地を旅した．

１９９１年以来１年置きの夏に，われわれ核データの仲間である岡本浩一氏と一緒にヨーロッパ各地を旅してきた．一緒にと言うよりか，彼のヨーロッパの城を訪ねるお供をしたと言った方が適切である．彼のヨーロッパの城にかける情熱は大変なもので，それを記録するための写真にも非常な熱の入れようである．将来，印刷にすることを考慮してすべてポジ・フィルムで撮っており，すでに相当の量になっているらしい．かってカールスルーエの Froehner 氏と話をしたときに，彼の城巡りのことが話題になったことがあったが，NEA データバンクや IAEA の NDS でも有名だったらしい．今や彼のライフワークになりつつある．何れ，その成果がまとめられてわれわれの眼前に登場することを期待したい．

さて今回は，彼の親戚の画家の野村氏が加わり，男３人旅となった．いつものようにウイーンで数日過ごした後，アムステルダム経由でスコットランドの首都エディンバラに入った．城巡りが中心であるから，街中よりも野山をレンターカーで走り廻ることが主流になる．今回巡った城は十数ヶ処にものぼった．今，撮ってきた写真を見ても，どれがどの城なのかすぐには思い出せない有様である．

巡った城のかなりの処で，マクベスが登場してきた．このことは，出発前からある程度予想されたので，岩波文庫のシェクスピアの『マクベス』を携えていった．また幽霊物語に付きまとわれることも覚悟の上だった．『マクベス』に出てくるグラームス城，コーダ城，インヴァアネス城など行く先々の城で，異なったマクベスが登場してきて混乱するばかりであった．実像と虚像とがある程度整理できたのは帰国してしばらく経ってからであった．スコットランド史によると，マクベスは勇猛な武将で，武力で王位を得，在位は１７年の長期にわたり善政を敷いたとされているが，周知のように，『マクベス』に登場する主人公は野心に満ち，ダンカン王を卑劣な方法で暗殺して王位を奪い，仲間のバンクオウにも疑心を抱き，誘い出して殺害した悪党である．しかも，これらの凶行に当っては，おびえてためらったのに強欲なマクベス夫人にそそのかされて事に当たり，その後は亡霊に悩まされ悪魔の予言に振り回されて破滅する，と言う何とも情けない武将になっている．

シェクスピアはどうやら 14,15 世紀に現存した城を舞台に 11 世紀のマクベスを投

にそそのかされて事に当たり，その後は亡霊に悩まされ悪魔の予言に振り回されて破滅する，と言う何とも情けない武将になっている．

シェクスピアはどうやら 14,15 世紀に現存した城を舞台に 11 世紀のマクベスを投影して作品に仕立てたもののようである．シェクスピアの時代錯誤とする本もあるが，これはシェクスピアの文学の世界と解すべきであろう．グラームス城にはダンカン王の間という部屋があって，王暗殺はこの城で行われたかと錯覚を起こしそうになる．作品での殺害現場はインヴァアネス城なのである．しかしインヴァアネス城もグラームス城も，先のコーダ城も実際のマクベスとは全く関係がないのである．我々はどうやら旅の間中，シェクスピアに振り回されたらしい．『マクベス』が無かったらマクベスはこれほど有名にならなかったのではなかろうか．当のマクベスはスコットランドのゴードン地方のランファナン村で戦死したと伝えられている．城巡りの途中，たまたまその村を通りかかったので，付近の写真だけを撮ってきたが，戸数は数十にも満たない寂れた寒村であった．

スコットランド史によると，中世の歴代のスコットランド王の殆どが暗殺されている．それが幽霊の物語を多く生む原因になっているようである．このように暗殺が多いのは，タニストリーと呼ばれる王位継承制度にあると言われている．母子継承システムであるために，長子継承制度に比べて王位継承候補者が極めて多くなり，候補者間で争いが絶えないのが原因らしい．『マクベス』もシェクスピア時代の英国の王家を正統化する立場から書かれたとする説がある．

余談になるが，出版された『マクベス』の日本語訳は坪内逍遥以来，かなりの数に上るが，これは万人が認める翻訳の決定打が無いことを裏づけているように思われる．いくつかの翻訳書を比較しているうちに，面白いことに気付いた．『マクベス』の第１幕第１場の終りに，３人の魔女（Wich）が "Fair is foul, and foul is fair." と叫ぶ有名な場面がある．この部分をどう訳すかが，訳者の苦心する処らしいのだが，私には，この部分の訳し方が『マクベス』をどう理解するかを占うキイ・ポイントになるように思えてならないのである．

スコットランドと言うと，スコッチウイスキーを思い浮かべる人が多いのではなかろうか．アルコールには全く縁遠い私としては，そんなことには何の関心もなく旅にのぞんだ．城巡りの途中で，キースの Strathisla 蒸留所を訪れた．ここは，日本でも有名なシーバス・リーガルの製造所であって，製造工程が見学できる．見学コースの最後に，種々のモルト・ウイスキーを嗅がせてくれるコーナーがあった．１年ものは無色透明で焼酎の香りだった．５年ものも同じ色で安物のウイスキーの匂いだった．１０年ものになると，琥珀色で何とも言えぬ良い香りになる．同じ物でも熟成させるだけで，これだけ変わるのかと感心した．次に各地の１０年以上のシングル・モルト

ウイスキーが実にうまかった．こんな事を言うと，物笑いの種にされるのが落ちであろうが，”ウイスキーとはこんなうまいものとは知らなかった”と言うのが偽らざる実感であった．正しい飲み方も教わった．私なぞは，ウイスキーと言えば氷水で割ったオンザロックにするもと決め込んでいたが，これが大間違いであることも知った．氷水でなく常温の水で１：１で割って香りを楽しんで飲むのが常道であるそうである．氷水で割ると香りの発散が押さえられてしまうのだそうである．ストレートで飲むのも悪くはないが，それよりもよりもこの方が良いと教わった．アルコール通である野村氏は，”あの親父めつまらぬ事を言う”といささか憤慨していたが，私には良い忠告であった．帰国してから読んだウイスキーのどの本にも，そうしたことが必ず書いてあった．今回飲んだシングル・モルト・ウイスキーの中で秀逸だったのは，タリスカー Talisker１０年ものとマッカラン The Macallanの１２年ものであった．前者はスカイ島産のシングル・モルトであって，私の好みに打ってつけのものであった．後者はスペイサイドのシングル・モルトであって，後日知ったのであるが，ウイスキーのロールス・ルイスと言われている代物で，シェリーの熟成に使用した樽を用いて熟成ているのだそうである．日本で手に入るか心配だったので，最近の海外旅行では珍しく，上の２本を担いで帰国した．その後，これらは東京の都心のしかるべき酒店でも入手できることを知り，残量を気にせずに安心して味わえることになった．下戸の私にとっては一大革命になった．

スコットランドのもう一つの名物に羊毛（ウール）がある．訪れた先々で，山の急斜面にへばりつくようにして草を食べている羊の群をよく見かけた．とくにハイランド地方では，山の岩肌の急斜面の草地に点在する羊の姿は印象的であった．遠くから見ると，白い岩に見えたり白い花を散りまぶしたようにも見えた．スコットランドの特徴的な風景と言えるのではなかろうか．そのくらい，何処へ行っても羊が見られ，さすがウールの国と実感したものだった．スカイ島では，車道にも群がって歩いているのに遭遇したし，いたる処に cattlegate *なるものがあり，さすが家畜の国と思われた．

ウール製品はなるほどと判るのだが．カシミアが特産と聞き，はじめ不思議だった．カシミアとはインドのカシミール地方の山羊の毛の製品である．それが何故にスコットランドかと言うのが素朴な疑問であった．しかしこれはすぐに解消した．ウールを染色，紡織する技術がカシミア製品にも生かされていて他を圧しているのだそうである．最近，日本には中国製のカシミアが大量に入ってきているようであるが，原料の質も紡織の技術もいまいちとのことである．

旅の途中にエルギンの Johnstons のカシミア・センターを訪れた．後日，エジンバラにあるカシミアの専門店も訪れたが，そこでもこのセンターから仕入れている由で

あった．ハイランドではホテルから３０マイルもある Lochcarron Weavers にもわざわざ足を運んだ．

肌さわりのよいカシミア製品を手にするとついつい欲しくなってしまうものである．先の専門店の店員の話では，肌触りだけでカシミアの品質を判定してはいけないそうで，品質が良くても，染料の種類や染色法で肌触りが微妙に変わるのだそうである．肌触りだけを問題にするなら，できるだけ染色していない原料に近い色のものを選ぶべきとのことであった．３人とも帰りの荷物はカシミアやウール製品でかなり膨らんでしまった．

最後に，明治の初め岩倉使節団がスコットランドにも訪れていることに触れておく．久米邦武の書いた『米欧回覧実記』に詳しく載っているが，使節団がスコットランドを巡った処はエジンバラを除きわれわれが辿ったコースとは全く別であるにもかかわらず，その記述は参考になるだけでなく，的確で観察力の鋭さに驚き入った．とくに，ゴム工場などの工程の記述なぞは，短時間によくも詳しく正しく理解したと舌を巻く思いである．過日，東京の目黒にある久米美術館で『米欧回覧実記』の草稿を見る機会があったが，実に細かい推敲が施されており，単なる見聞記でなく質の高い報告書であると納得した．昨今われわれも含めて海外に行く機会は多くなったが，行く先々の国の実情を自らの目で正しく把握するよりは文字とか耳からの情報で何とはなしに理解したように錯覚している場合が多いのではないだろうかと危惧している．『米欧回覧実記』の他の国の部分でも，当時の若者の的確な観察と洞察には感心させられる処が多いが，この稿の範囲を超えるので別の機会にしたい．

＊　通路の幅一杯に，かなり深い溝が掘られ，その上に鉄のパイプが少しのすき間を空けて並べてある．車や人は通れるが，家畜は通れないようになっている．